

## ⑤江戸城

■太田道灌、江戸城を創った英雄。

道灌は1432年、相模守護代、太田資清と正室、長尾景仲の娘との嫡男に生まれた。

生誕の地、鎌倉扇谷の屋敷跡に、4代後のお勝の方（家康側室）が、高祖父、道灌を偲び英勝寺を建立する。

相模守護（神奈川県の一部）・武蔵守護（東京都、埼玉県、神奈川県の一部）は上杉氏。

道灌の祖父、長尾景仲は、白井長尾氏の当主で、山内上杉氏の筆頭家老・武蔵守護代だった。

嫡男は景信だ。景信の嫡男が、景春。

白井長尾氏と上杉謙信の生家、越後守護代・越後長尾氏とは同族で婚姻関係も続き親しくしていた。

父、太田資清は、山内上杉家の分家、扇谷上杉家の筆頭家老・相模守護代だ。

長尾景信と太田資清は義兄弟となり親しく付き合ったが、主君が本家、山内上杉氏と分家、扇谷上杉氏であり、先々差が出てくる。

道灌は、幼少時から飛び抜けて賢かった。

関東最高の学問所、鎌倉五山の建長寺や足利学校で学ぶ。

飛びぬけた秀才が集まって学んでいたが、その中でも、他を寄せ付けない天才ぶりを発揮し、皆の羨望の的だった。

相模・武蔵は、室町幕府成立時から、鎌倉公方（後には古河公方）、足利氏を擁する派と関東管領、上杉氏派との勢力争いが続いていた。

1455年初め、鎌倉公方、足利成氏が権力を握る為に、関東管領、上杉憲忠を暗殺した。

ここから、関東を二分する28年間にも及ぶ戦い、享徳の乱が始まる。

関東管領、山内上杉家は、憲忠の後継者を弟、房顕（1435-1466）とする。

幕府は房顕支援の為に、足利一門の今川範忠を起用して成氏討伐に向かわせた。

範忠は強く、成氏を破って鎌倉を制圧した。成氏は古河に敗走し「古河公方」となる。

関東管領、上杉房顕は勢力を取り戻した。

1456年道灌<sup>どうかん</sup>は、家督を継ぎ、扇谷<sup>おうぎがや</sup>上杉家の筆頭家老・相模守護代となる。

足利成氏は「古河公方」となって、巻き返しを図る。

だが、上杉氏側の軍事総責任者となった道灌<sup>どうかん</sup>は、幾多の戦いに勝ち、優位に戦いを進める。

道灌<sup>どうかん</sup>は、戦いの采配も抜群で、軍学も極めた文武両道の天才武将だと名声が響く。

そこで、道灌<sup>どうかん</sup>は、戦略上の防御と攻撃の拠点として、次々と要衝の地に城を築き、兵を配置する。

1457年、扇谷<sup>おうぎがや</sup>上杉氏の武蔵国中央の拠点とするために、川越城を築城。

扇谷<sup>おうぎがや</sup>上杉氏、上杉定正（1443-1494）に引き渡し、扇谷<sup>おうぎがや</sup>上杉氏の居城となる。

続いて、房総（千葉県）守護、千葉氏に対峙する為、利根川下流に城が必要だと考え、武蔵と下総の境、隅田川の河口に江戸城を築く。

かつて秩父江戸氏の居館があった江戸桜田の高台を拡張改修して築く。

道灌<sup>どうかん</sup>25歳、関東制圧の拠点、江戸城が完成し得意満面で居城とする

江戸の持つ価値をよくわかっていたのだ。

道灌<sup>どうかん</sup>は城内で上杉氏の軍備の増強と兵士の戦闘力の強化に取り組む。

「騎馬武者による一騎討ちの戦いは古い、集団での戦いに変える」と足軽の戦力化に重点を置く。

武士と農民の間だと軽く見られた足軽に、長槍・弓などの訓練をし、武士の心得も教える。

こうして足軽を主要な戦闘集団とし、道灌<sup>どうかん</sup>の軍事力は質量共に飛躍的に拡大していく。

戦さの合間には学問の普及にも取り組み、京から迎えた文人から古典や和歌や漢詩を学ぶ。

連歌会、お茶会などよく催し、文武両道の鍛錬こそ武士に必要と、率先して遊び、楽しむ。

1466年、関東管領、山内上杉氏、房頭<sup>ふさあき</sup>が亡くなる。

山内上杉家の筆頭家老・武蔵守護代、景信（1413-1473）は、越後上杉家から顕定<sup>あきさだ</sup>を婿養子に迎え、後継とするために画策する。

景信の妻は、越後を実質治める越後守護代、頼景の娘だった。そこで、越後上杉家、顕定<sup>あきさだ</sup>を

迎えることで、関東管領、山内上杉氏の権力を握ろうとしたのだ。

反対派も多くいたが排除し、関東管領、山内上杉<sup>あまさだ</sup>顕定を実現した。

翌1467年、扇谷<sup>おうぎがや</sup>上杉家を16歳の政真<sup>まさざね</sup>が継ぐ。

道灌<sup>どうかん</sup>は、政真<sup>まさざね</sup>から父親代わりと信頼され、思う存分扇谷<sup>おうぎがや</sup>上杉家を率い、関東管領、上杉<sup>あま</sup>顕<sup>さだ</sup>定に成り代わり破竹の進撃を続ける。

ところが1473年、政真<sup>まさざね</sup>は討ち死にし、子はなかった。

嫡流は絶え、政真の叔父、定正を後継に迎えるしかなかった。

道灌<sup>どうかん</sup>は、定正も政真<sup>まさざね</sup>と同じように、道灌<sup>どうかん</sup>を信頼し思うがままに戦いを進められるはずだった。

だが、定正は政真とは違い、道灌<sup>どうかん</sup>の思い通りにはさせず当主として口出ししっくりいかない。

同じ年、<sup>あまさだ</sup>顕定に「当主にした」と恩に着せ山内上杉家を思うがままに操った景信が亡くなる。

<sup>あまさだ</sup>顕定は、大きな重しが取れ、大喜びだ。

覇権を確立する絶好の時だと考え、景信の嫡男、景春を筆頭家老とせず、言うことをよく聞く景信の弟、忠景を筆頭家老に任命した。

<sup>あまさだ</sup>顕定に忠誠を誓う忠景に家老職を与え、景春を排除し、景信の影響力を取り除こうとした。

景春は、父以上に勇猛果敢な優れた武将であり、<sup>あまさだ</sup>顕定は「悪夢の再来になる」と恐れたのだ。

しかし景春は筆頭家老の地位を叔父に取られ、<sup>あまさだ</sup>顕定に裏切られたと深く恨んだ。

そして、準備を整え、<sup>あまさだ</sup>顕定に戦いを挑む。

1476年、長尾景春の乱が起きる。

道灌<sup>どうかん</sup>は「戦いを避けるべきで、景春をせめて武蔵国守護代にすべきだ」と、<sup>あまさだ</sup>顕定に進言するが、拒否された。

扇谷<sup>おうぎがや</sup>上杉家は山内上杉家に従う立場であり、道灌<sup>どうかん</sup>と景春は、従兄弟で長い付き合いがあり仲もよかったが、敵味方に別れる。

景春は、劣勢の中並外れた才知を生かし、本来の敵方、古河公方を味方につけ、反上杉氏の国人衆を巻き込み決起し、有利に戦いを進める。

1476年、ついに、越後から来たよそ者である顕定<sup>あきさだ</sup>は、領民の支持を得られなくなり、敗れ追われて上野国<sup>こうづけ</sup>（群馬県）に逃げる。

ここで、道灌<sup>どうかん</sup>は、景春を倒す為に、戦いの最前線に出る。

扇谷上杉家<sup>おうぎがや</sup>、道灌<sup>どうかん</sup>が、山内上杉家<sup>あきさだ</sup>、顕定<sup>あきさだ</sup>（1454-1510）に成り代わり、鮮やかな戦いぶりを繰り広げ、形勢は逆転した。

1480年、景春は、追われた。

1482年、顕定<sup>あきさだ</sup>は、道灌<sup>どうかん</sup>に感謝するどころか、その強さに恐れをなし、関東管領、山内上杉家当主として、単独で古河公方と和解してしまう。

主力になって戦った扇谷上杉家<sup>おうぎがや</sup>、上杉定正・道灌<sup>どうかん</sup>抜き頭越しの和睦だった。

それでも、和議が成立し、長く続いた享徳の乱が終わった。

終わらせたのは、道灌<sup>どうかん</sup>だった。

だが、道灌<sup>どうかん</sup>は怒る。

道灌<sup>どうかん</sup>は、実力のある扇谷上杉氏<sup>おうぎがや</sup>が山内上杉家を配下に置く時が来たと、奮い立った。

扇谷上杉氏当主、定正は、扇谷上杉家<sup>おうぎがや</sup>が山内上杉家に大きな影響を持てばいいと思う程度だったが。

道灌<sup>どうかん</sup>は、定正に「主力で戦った扇谷上杉家<sup>おうぎがや</sup>に対し、山内上杉家は、従うだけのただの分家扱いとした。ここで、扇谷上杉家<sup>おうぎがや</sup>の力を見せなければ当主としての力を疑われる」とまで断言した。

そして、弱っている山内上杉家を徹底的に追い落とすよう勧める。

定正は、顕定<sup>あきさだ</sup>を放逐する勢いの道灌<sup>どうかん</sup>に押し切られる。

山内上杉家、顕定と扇谷上杉家、定正とは、一触即発の重苦しい雰囲気となる。

戦いの準備を終え道灌<sup>どうかん</sup>は、勝利を確信している。

道灌は山内上杉家を倒すと自信满满だったが、定正は道灌に追い出されると恐怖する。

上杉顕定<sup>あきさだ</sup>も事態の動きをよく見ている。

道灌と戦えば負けるのは明らかであり、何としても避けたいと考える。

生き残る道は調略しかない、道灌<sup>どうかん</sup>が定正を亡き者にし扇谷上杉家<sup>おうぎがや</sup>を乗っ取ろうとしているとの情報を流す。

そこで、おもむろに、かつ慎重に、上杉定正に和解の申し入れをする。

話し合いに乗ってきた定正に対して、道灌<sup>どうかん</sup>の謀反の動きを知らせる。

長く道灌の存在を恐れ、嫌った定正は思い当たるところが多々あり、間違いないと顕定の言葉<sup>ことば</sup>を信じた。

1486年夏、道灌は主君、定正に謀られ、だまし討ちに遭い、殺される。

道灌<sup>どうかん</sup>に驕りと油断があった。

道灌は遊び心にあふれ、人を食った独特の世界観で、皆を引きつけ魅了した。

翻弄される凡人は、道灌の度量の大きさが理解できず、疑心暗鬼に陥ってしまうこともあったが。

戦場でも、ユーモアあふれる歌を創り、温かい人情話が得意で、多くの伝説を作る。

露おかぬ かたもありけりゆふ立の 空よりひろき 武蔵野の原  
武蔵野の地を愛した道灌<sup>どうかん</sup>の心意気だ。

道灌は刺客に槍で刺された。その時、刺客は

かかる時さこそ命の惜しからめ と言い

道灌は致命傷に少しもひるまず

かねてなき身と思ひ知らずば と詠んだ。

武将として生きて来た。死ぬ覚悟はしている、命は惜しくない、潔く死ぬと。

死の間際、道灌は、「当方滅亡」と叫んだ。

これで、扇谷上杉家<sup>おうぎがや</sup>は終わった。と言ったのだ。その通りになる。

あまりにもかっこよすぎる人生だった。

出来すぎた逸話が多くて、後世のお勝の方が、伝説を創った感もあるが、事実は事実で、無念の死だったことには間違いない。

かっこ悪い死に方だった。